

教員になり、毎日、教壇に立ち、授業をしていた。だが、授業をしなくなってから、もう20年近く経つ。その代わりに、県内各地に赴き、授業を参観し、アドバイスを送るということが続いている。このようなことを始めたのは、2011年、平成23年の9月である。なぜ、鮮明に覚えているかという、この年のいわゆる8月人事により、県教育センターに異動になったからである。あの東日本大震災があった年である。

震災の影響のため、県教育センターの建物は、その機能を維持できなくなっていた。立ち入り禁止の建物もあった。私が8月から仕事をするようになった執務室は、臨時の間借り部屋だった。本来は、研修室だった。センターでの研修ができないため、執務室となっていた。本来の執務室は、立ち入ることが許されなかった。机は、学校などによくある長机である。いすはパイプいすだった。これは、大変な所に来てしまったと思ったが、慣れれば何とかなるものである。

研修がストップしているという事態が、私には追い風だった。本来であれば、夏休みにあたる8月は、研修のハイシーズンであり、研修真っ盛りである。7月まで、国語の授業に関わっていなかった人間が、8月の研修で国語の話をするというのも無理がある。おかげで、8月の1か月間をかけて、一気に国語のことを詰め込むことができた。一夜漬けのようなものである。

このときは、県内で、校舎などが機能不全に陥っていた学校もあった。全町避難、全村避難もあった。それでも、初任者研修などは進めなければならない。法に定められた研修である。そこで、どうしたか。初任者がセンターに来るのではなく、こちらから初任者の勤務先に出向いて、授業を参観したり、センターで行うべき講義などを進めたりした。間借りしている校舎でがんばっている初任者もいた。困っていることはないか、悩んでいることはないか、話を聞く時間も設けた。

記録が残っている。初任者訪問キャラバンのスタートは、9月12日（月）だった。中学校の国語の先生だった。授業を参観した。明るく、よく声が通る先生だった。教材は、松尾芭蕉の「おくの細道」だった。興味や関心をもたせるように導入を工夫していた。学習課題を板書して赤線で囲んでいた。学習課題は、「芭蕉にとっての旅とは、どのようなものだろうか。」だった。生徒は全員、ノートに書いていた。課題がむずかしいと感じた。この課題ならば、有名な冒頭部分を読んでからの方がいいのではと感じた。

授業は、一問一答式の質問が多く、どうしても教え込もうとしてしまっていた。グループになるときの指示を明確にし、わかりやすい指示や発問を心がけることをアドバイスした。もう少し、生徒が話したり、書いたりする時間をとると、授業が変わってくることも話した。

この先生とは、その後も何度か会う機会があった。いつも元気で、こちらにパワーをくれるような先生である。今も、はつらつと、いい国語の授業を目指して努力しているはずである。